

## 令和4年度 経営協議会学外委員等からの意見と対応状況

### ○経営協議会学外委員からの意見と対応状況

番号	経営協議会	学外委員からの意見	本学の対応状況
1	第103回 R4.6.17開催	企業にとって、技術系の人材を採用しようとする と、鍛えるのに時間を要することもあり、やはり修士 課程まで修了している方が求められることが多くなる ように思う。例えば福井大・富山大・金沢大との北陸 地区国立大学連合の枠組みを、大学ごとに異なる 特徴があることも踏まえ、学生獲得に活かしていくこ とはできないか。	北陸地区国立大学連合に参加するそれぞれの大学 において、大学院進学説明会を以下のとおり対面 形式により開催した。 金沢大学: 令和4年9月 9日(金) 参加学生数4名 富山大学: 令和4年9月15日(木) 参加学生数5名 福井大学: 令和4年9月29日(木) 参加学生数5名 また、金沢大学において大学院進学説明会を開催 した同じ日に、融合科学共同専攻について金沢大学 と合同説明会を開催した(参加学生数8名)。
2	第105回 R4.11.25開催	研究領域について、学生や企業からの見え方も非 常に重要と考えるので、学生や企業にも伝わるよう な説明を色々な機会を捉えて是非実施いただきたい。	本学への入学希望者に対する研究領域の説明に ついては、大学院進学説明会(令和4年度:オンライ ン形式により4回開催)及び受験生のためのオー プンキャンパス(令和4年度:オンライン形式により3 回、対面形式により1回開催)の機会を捉えて実施 した。 また、就職支援室で作成している企業採用担当者 向けパンフレットに研究領域に関する内容を掲載し、 修了生の就職先等、本学学生の採用実績を持つ企 業やその他求人企業に同誌を送付して情報提供を 行っている。また、就職支援室に面談に訪れた企業 に対しても同誌を配付し、内容の説明を行っている。

### ○アカデミックアドバイザーからの意見と対応状況

番号	アカデミックアドバイ ザーとの懇談会	アドバイザーからの意見	本学の対応状況
1		10領域というのは、大学のリソースの規模からする とやや細か過ぎる感じがする。一つ一つのテーマは 突出した部分があり魅力的だが、多様な領域の寄り 合いに見えてしまう。そう見えないように、JAIST全 体として科学技術領域の中で目指す方向性を議論 し、その中で、各領域の研究資源の保有状況(研究 ポートフォリオ)の設計について議論するべき。科学 技術領域の中でJAISTとしてどのようなポートフォ リオを設計するのかという議論が必要。	令和4年5月から、本学における研究振興及び研究 推進に向けた支援事業を実施し、目標を達成すると ともに、本学の研究力を高めることを目的として、「研 究力強化タスクフォース」を設置した。各研究領域長 を構成員とすることとしたほか、研究力のある若手 教員やIR担当専門員の参加も検討予定である。
2	R4.2.7開催	少々マイナーなトピックでも良いので、これなら JAISTというものを幾つか見せていくのが良い。	令和4年4月から、既存の「産学官連携本部」を改 組し、新たに「未来創造イノベーション推進本部」を 設置した。 また、同本部内の「イノベーション創出機構」に、本 学が重点分野と位置付ける研究分野(五感情報通 信技術に代表される生体機能・感覚研究分野、カー ボンニュートラル等の地球規模の環境分野、自然現 象・自然災害に関する分野)に係る3つのセンターを 新たに設置した。
3		単に研究室のテーマを領域でくるだけではなく、 JAISTとして追究すべき共同研究テーマを戦略的に 設定し、その共同研究に教員が連携して取り組み、 それを大学として支援する形で領域を育てる必要が ある。	令和4年4月から、本学における研究上の強みを中 核とした国内外の研究機関等とのネットワークにより 構築される共創的イノベーション創出拠点の形成を 推進するため、「エクセレントコア推進本部」を「共創 的国際研究推進本部」に改組した。エクセレントコア は、共同研究等により企業から受け入れる研究者を 置き、二つ以上の研究領域からなる研究組織とする ことができるほか、学内施設利用料や研究員の雇 用経費等について大学として支援している。

○産業界の有識者からの意見と対応状況

番号	産業界の有識者と学長との懇談会	アドバイザーからの意見	本学の対応状況
1		<p>企業として国際標準化を進めているが、それを担える人材を大学で育成してほしい。</p>	<p>石川キャンパス、東京サテライトにおいて、「国際標準化概論」を開講している。規格と法規、標準化政策など概論に加え、国際標準化で活躍している第一線の専門家による国内外の標準化機関団体の活動・技術的課題、分野別の具体的な活動事例の紹介により、ICT分野の国際標準化について幅広く理解するとともに、その知識を駆使して自身の研究における標準化戦略について検討する能力・研究姿勢を育成している。</p>
2	<p>R4.1.26開催</p>	<p>Matching HUBについて、今はシーズとニーズとの引き合わせの場としてはうまく機能していると思うが、Matching HUBを一步踏み込んで更に成長させるためには、引き合わせの先の実際のコラボレーションに必要なリソース、機能、機会を組み合わせる場にはできないか。異なる企業同士のオープンイノベーションを進めていくのに必要な分野、知識を大学として提供できるようになれば、Matching HUBをシーズとニーズを引き合わせる以上の役割を果たすイベントにできる。</p>	<p>Matching HUB事業による地域活性化のノウハウとネットワークを活用した北陸RDX事業(経済産業省「J-NEXUS産学融合先導モデル拠点創出プログラム」事業)において、参画機関による北陸DXアライアンス設置により、北陸地域の産業資源とDXを組み合わせ次世代に向けた新産業を生み出す「Regional Digital Transformation (RDX)」を推進している。</p> <p>Matching HUBにおけるマッチング事例等を基に、本事業の推進計画を策定・実行するとともに、新製品・新事業の育成支援と事業化を強化し、さらに、地域課題の集約、当日のマッチング支援やコンソーシアム形成など、Matching HUB全体の機能強化を促進している。</p> <p>また、令和5年4月に設置した「超越バイオメディカルDX研究拠点」においては、JAISTイノベーションプラザを活用し、本学の最先端研究のシーズや地域企業のニーズ・シーズ、社会ニーズなどをシェアし共創するシェアードオープンイノベーションを推進しており、多種多様な業種・業界の研究者、技術者等の交流により、更なる革新的な研究や技術開発の促進が期待される。</p>